

研究課題名 当院誤嚥性肺炎入院患者における嚥下機能に関する機能向上因子の検討 に関する情報公開

1. 研究の対象

承認日～2021年3月31日に当院で誤嚥性肺炎の診断を受けられた方

2. 研究目的・方法・研究期間

目的；サルコペニアによる摂食嚥下障害とは、全身および摂食嚥下に関与する骨格筋の筋力・筋肉量・機能のそれぞれの低下に伴う摂食嚥下機能低下のことを指しています。下肢の筋力低下が舌圧と年齢に関連していることや、誤嚥を認めた高齢者は誤嚥を認めない群に比し有意に舌筋力が低下していたと報告があります。また、嚥下関連筋群（オトガイ舌骨筋・顎舌骨筋・中咽頭周囲）の筋肉量については、CTや超音波での検査によって年齢と相関して、減少することが知られています。嚥下機能に関しては、サルコペニアの高齢者は喉頭前庭閉鎖の遅れ、舌の移送機能の低下、舌骨の動きの遅延が見られたと報告されています。このように筋力・筋肉量・機能それぞれに関しては摂食嚥下障害との関連は報告されています。一方で、その結果生じる誤嚥性肺炎とサルコペニアによる摂食嚥下障害の関係を示した報告はありません。また臨床の現場では、誤嚥性肺炎を発症し、急性期の治療を行う中で、リハビリの介入もあり、その後の回復期病院への転院期間も含めて、嚥下機能が向上する症例に遭遇します。そのような症例は、リハビリ介入による筋力強化により嚥下機能が向上すると考えられますが、サルコペニアによる摂食嚥下障害を有する誤嚥性肺炎の症例に関して、どの因子を有すると嚥下機能が向上しうるのかについては明らかになっていません。それらが明らかになれば治療介入時のリハビリ介入や患者・家族への情報提供に際して有用な情報となります。本研究では、その機能向上因子を解明するために臨床研究を行うことといたします。

方法；当科に誤嚥性肺炎の診断で入院した75歳以上の患者を対象とします。誤嚥性肺炎の診断は、胸部レントゲンまたは胸部CT検査にて新たな浸潤影がみとめられ、また、次の感染を示す徴候①、または②のいずれかの所見が得られた症例とします。

① 悪寒または発熱 (>37.8℃)

② 白血球増加 (>10,000/mm³)、咳、痰、呼吸苦、胸痛、胸部異常聴診音

Dysphagia Severity Scaleが1点以上改善した群と、改善しないもしくは悪化した群に分けます。この2群を比較し、統計学的に有意差の認められた項目に関してロジスティック回帰分析を行い、嚥下機能向上因子の検討を行います。評価項目として挙げた14項目のうち統計的に有意差がついたものを独立変数としてロジスティック回帰分析を行います。DSS改善群と対照群でそれぞれ約40の症例数を目標とします。

研究期間；承認日～2021年3月31日

3. 研究に用いる試料・情報の種類

情報；年齢，性別，BMI，簡易栄養状態評価（MNA-SF），Bathel Index，MMSE，薬剤数，In Body，握力，舌中央部の厚さ，頭部挙上筋力，vitality index，Dysphagia Severity Scale 等

試料；血液（血清アルブミン）

4. お問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。

ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。

研究責任者：

名古屋大学大学院医学系研究科地域在宅医療学・老年科学・准教授・梅垣宏行